

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：
トランスナショナル・フローとローカリティの組み
換え創造：
ポスト社会主義状況のローカリティとストリート性：
ポスト社会主義のストリート—モンゴル・ウランバ
ートル市における都市空間の再編

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西垣, 有 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001216

ポスト社会主義状況の ローカリティとストリート性

ポスト社会主義のストリート モンゴル・ウランバートル市における都市空間の再編

西垣 有
大阪大学大学院

この論文の目的は、旧社会主義圏に位置するモンゴル国の首都ウランバートル市において、冷戦後の市場経済への移行期にあらわになった生のあり方——特に公的部門の民营化に際してあらわれた、ストリートにおける生のあり方——を考察し、その「ポスト社会主義」期に固有の様態を明らかにすることである。もちろん、ストリートは多様であり、必ずしもポスト社会主義期においてのみ形成されるわけではない。本稿では、ポスト社会主義期に固有のストリートのあり方を明らかにするために、まず、論文の前半部において、19世紀から20世紀にかけてのウランバートル市の建設に焦点をあてながら、プレ社会主義から社会主義建設期におけるストリートの変遷をとりあげ、続いて、論文の後半部において、20世紀末から21世紀初頭にかけての、社会主義時代からポスト社会主義時代への移行期にあらわになるストリートのあり様をとりあげる。

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1 問題の所在 | 3 ポスト社会主義期のストリート |
| 2 ウランバートル市の歴史
——プレ社会主義/社会主義 | 3.1. 市場経済への移行 |
| 2.1. フレーとホト | 3.2. 新たな都市計画と土地私有化 |
| 2.2. フレーとホトの間
——プレ社会主義期のストリート | 3.3. 2つの移動性
——ポスト社会主義期のストリート |
| 2.3. ウランバートル市の建設
——人口統計と都市計画 | 4 結論にかえて |

キーワード：ポスト社会主義、都市、私有化=民营化、都市計画、モンゴル

1 問題の所在

この論文では、「ポスト社会主義のストリート」という主題によって、以下の2つの問題の考究を試みる。第1の問題は、旧社会主義圏に位置するモンゴル国の首都ウランバートル市において、冷戦後の市場経済への移行期にあらわになった生のあり方——特

に公的部門の民営化に際してあらわれた、ストリートにおける生のあり方——を考察し、その「ポスト社会主義」期に固有の様態を明らかにすることである。

冷戦構造が崩れた1990年代以降、モンゴル国は、私有化（民営化）、市場経済化の名のもと、急激な変化に直面してきた。1990年代前半の経済混乱期を経た現在でも、IMFや世界銀行、アジア開発銀行（以下 ADB）等の国際機関の関与のもと、市場経済へのスムーズな「移行」を目指し、多くの開発、援助のプログラムが継続されている（cf. Bruun and Odgaard 1996; 永井 2002）。旧国有財産の私有化がすすめられ、2003年には土地の私有化も開始された。個人住宅を建設する資金を補うため、土地を担保に、金融機関に融資を求めることが可能となったばかりか、現在では、外国人だけでなく一部の成功したモンゴル人をターゲットとして、一戸建ての高級住宅や、多国籍の合弁会社の手によるセキュリティを重視したゲート式の居住区も建設されている。このような投資が可能となった要因の1つとして、モンゴル人の外国への出稼ぎと、そこからの送金が挙げられる。

ウランバートル市における近年の都市開発というコンテキストにおいて、以上のような人やカネのトランスナショナルな移動が重要な意味を持っていることは否定できない。しかし、この論文において焦点をあてるのは、このような国境をまたいだ、文字通りトランスナショナルな移動や、生のあり方ではない。本稿が焦点をあてるのは、一方において、そのようなトランスナショナルな移動性を産出する可能性を保持しながらも、必ずしもそのような形態で顕在化するとは限らない移動性の別のあり様である。

もちろん、ストリートは多様であり、必ずしもポスト社会主義期においてのみ形成されるわけではない。本稿では、ポスト社会主義期に固有のストリートのあり方を明らかにするために、まず、論文の前半部において、19世紀から20世紀にかけてのウランバートル市の建設に焦点をあてながら、プレ社会主義から社会主義建設期におけるストリートの変遷をとりあげ、続いて、論文の後半部において、20世紀末から21世紀初頭にかけての、社会主義時代からポスト社会主義時代への移行期にあらわになるストリートのあり様をとりあげるという手続きをとる。

このような手順を踏むことによって、本稿がとりくむべき第2の問題が明らかになる。この論文の第2の問題は、以上の2つの移行期において先鋭的にあらわれるストリート現象とは区別されるべき次元として、そのようなストリートの顕在化を可能にする潜在的なストリート性の次元——本稿では特にその移動性、流動性を強調する——に定位しつつ、そのストリート性が差異化し、転移していくプロセスを浮き彫りにすることである。というのも、ストリートを、移行期において鋭くあらわれる側面だけに限定した場合、ストリートの広がりのもつ他の半面を捉えそこなうおそれがあるからである。そして、われわれがあつかう第1の問題（ポスト社会主義のストリート）も、この第2の問題（移動性、流動性としてのストリート性）に接続することによって、はじめて適切に

問えるようになるはずである。

本稿では以上の2つの問題を考究することによって、われわれの生がそのストリー特的位相とどのように関わっているのか、そして、それが現在どのような形態をとっているのかを検討したい。

2 ウランバートル市の歴史——プレ社会主義／社会主義

2.1. フレーとホト

まず、ウランバートル市の歴史を概観しておこう。そのための導き糸として、ここではフレーとホトという2つの概念に焦点をあてる。2つの概念の交錯、絡みあいに注目しながら、プレ社会主義期から社会主義期にかけてのモンゴルにおける都市の生成のあり様と、その際のストリー特的あらわれを追いたい。はじめに、両概念について簡単に整理しておこう。

(1) ホト：現代モンゴル語において、「都市」を表すもっとも一般的な語彙は「ホト」(hot, 文語形はqota)である。ホトは他にも、「数戸が集まって組織された牧畜生産単位」(qota)や「家畜のねるところ」(qoton)などの意味を有する多義的な語である(小沢1994: 543)。その語源に関しては諸説あるが¹⁾、元来は後二者にみられるような、遊牧的概念であったとされている(Luvsanbaldan 1975)。畜群を中央に数軒のゲル(天幕)が並ぶ風景をイメージすると分かりやすい。そこには、人(およびその集合)と場所(およびその形式)の両方の意味が、分かちがたく結びついている。

ではホトはいつ「都市」, 「定住」の意味で用いられるようになったのであろうか。現存する最古の文献資料の1つである『元朝秘史』(明代に現在の形で完成したとされる)においてあらわれるホトには、「城子」あるいは「城」という漢語傍訳が付されており²⁾、すでに遊牧の意味ではなく、定住の意味で用いられている。ただし、その使用頻度は低く、いわゆる「都城」を指す一般名詞にはバルガスという別の語が用いられている。

杉山正明は、元代の大都建設時の平面プランとして「坊制」が採用された際、その街区(=坊)をモンゴル人が「ホト」(qoton, qota)と呼ぶようになり、それが現在の北京の横丁、路地を意味する「胡同(フートン)」として残ったことを指摘している(杉山2000: 109)。明代以降の文献では、ホトは「都城」を指す一般名詞として定着している³⁾。

(2) フレー：フレーは元来「囲い」, 「環」を意味する。ベルシャの歴史家ラシード・ウディーンは、フレーの文語形クリエン(küriy-e)について、「それは環という意味で、昔からある部族がある地点に野営するとき、環の形にあつまり、その首領は円の中心にいた。今日でも敵軍が近づくとこの形で野営し、異分子や敵が内部に入れないようにす

る。このようにして宿営した千人隊をクリエンという」と記している⁴⁾。フレーも、先にみたホトと同様、かつては人の集団とその空間的形態が不可分なものとして理解されていた。

「フレー」はモンゴルに仏教が普及したのち、移動寺院（仏教化したフレー）を意味するようになり、さらに、19世紀以降のフレーの定住化にともない、現在では単に「寺院」（寺院組織、あるいは複数の堂宇を含む伽藍の全体）を意味する語となっている。本論であつかうウランバートル市の前身であるイフ・フレー（「大いなるフレー」の意）も、このようなフレーの一つであり、さらに言えば、もっとも代表的かつ大規模なフレーであった。

ウランバートル市の歴史をふりかえる際、現在ではその「起源」を1639年におくのが一般的である⁵⁾。これは、チンギス・ハーンの血を引く貴族（ハルハのトゥシュート・ハーン家）の出身で、のちに外モンゴル最高位の活仏となったジェブツンダンバ・ホトクト1世（1635-1723）という人物が5歳の時、彼に献上された移動式のゲル寺院の建立を、ウランバートル市の起源とする見解に基づいている。この「起源」とされる寺院は、モンゴル年代記『エルデニイン・エリヘ』に「黄色い布のホト」（shar bösyin qota）としてあらわれる（Galdan 1960: 91）。それがのちに、歴代のジェブツンダンバの座す「イフ・フレー」、あるいは略して単に「フレー」とも呼ばれる大寺院へと発展する端緒として解釈されている⁶⁾。

この移動寺院は、当初、必ずしも現在のウランバートル市の位置するトーラ・セルベ河畔ではなく、オルホン河流域のエルデネ・ゾー寺（かつてのモンゴル帝国の首都カラコルム跡に位置する）近辺を中心に、現在のモンゴル国の中心部を大規模に移動していたと考えられている。しかし1687年にハルハ（東モンゴル）とジュンガル（西モンゴル）との間で抗争が起こると、ハルハの貴族であったジェブツンダンバ1世は現在の内モンゴルへと逃れ、清朝の保護下に入る。

1696年、清朝の康熙帝率いる親征軍がガルダン率いるジュンガルを破ると、ハルハの諸侯は外モンゴルの旧牧への帰還を開始する。1700年、ジェブツンダンバ1世がハルハの故地へと戻ったのち、イフ・フレーは清朝の支配下の外モンゴルにおいて移動を繰り返しながら、露清間交易の中継地としてその規模を拡大し、徐々に定住的傾向を強めていく。18世紀初頭には、すでにイフ・フレーにおけるロシア、清両国の商人の交易活動は、ロシア政府が北京へ派遣していた官営隊商による対清貿易の独占を脅かすほどであったという（柳澤 1986: 78）。

イフ・フレーは1778年に現在のウランバートル市の地に宿営したのち、ほぼ定住化を終え⁷⁾、フレーの東側の地に漢人商人街「買賣城」（ナイマー・ホト）が建設される。1863年にはロシア領事館も設置されている。

1911年、辛亥革命により清朝が倒れる直前に、内外モンゴルが独立を宣言した際、

イフ・フレーはニースレル・フレー（首都フレー）として、ジェブツンダンバ8世（1869–1924）をボグド・ハーン（「聖なる皇帝」）として戴く「共戴モンゴル国」の首都に定められる。その後、1915年の露蒙中キャフタ三国協定によって、モンゴル国の「独立」は取り消されるも（「自治」となるが、やがてそれも撤回される）、続くシベリア内戦の混乱を経て、1921年にソ連赤軍とモンゴル人民党軍がウンゲルン男爵率いる白軍の残党を破り、フレーを「解放」してジェブツンダンバ8世を元首とする人民政府を樹立する（モンゴル人民革命）。1924年にジェブツンダンバ8世が入寂すると、その転生者はもはや認定されず、首都フレーはウランバートル・ホト（「赤い英雄の都市」）と改称され、モンゴル人民共和国の首都となる。

2.2. フレーとホトの間——プレ社会主義期のストリート

このように、フレーとホトは複雑に絡みあいながら、ウランバートル市の来歴を構成している。イフ・フレーの「起源」としてのゲル寺院、「黄色い布のホト」は、ホトの遊牧的用法であり、イフ・フレーの東側に形成した漢人商人街「ナイマー・ホト（買賣城）」はホトの定住的用法である。このようなフレーとホトの交錯を「フレーからホトへ」というかたちで整除し、ウランバートル市の歴史を語る枠組みを編みだしたのは、社会主義時代の歴史家ドゥゲルスレン（1917–1970）であった。

ドゥゲルスレンは、移動するフレーが宗教的中心となり、露清間の長距離交易路に定住化し、経済的な中心として資本主義化していくプロセスの行き着く先に「革命」を置き、社会主義時代のパラダイムに従って都市史を体系化した人物である。ここで注目したいのは、その際、ドゥゲルスレンが、寺院としてのフレーとは区別されるべき「都市化」の萌芽として、イフ・フレーの東側に建設された漢人商人街「ナイマー・ホト（買賣城）」と、そこからフレーを東西からとりかこむように形成された漢人商業街区（東西ダムノールチン）とに着目している点である。

ドゥゲルスレンは、イフ・フレーが露清間の交易路に定住化したことによって、フレーの東側に漢人商人街「ナイマー・ホト（買賣城）」が建てられ、さらに1820年から1825年にかけて、そのナイマー・ホトの漢人商人たちがフレーの東西を囲むように「ダムノールチン」という商業街区を形成し、それが「ほとんどイフ・フレーと1つになりそうなほどであった」（Dügersüren 1999: 39）ことに注目する。さらに、1860年にはロシア商人がフレーへと進出したことにも触れ、ついには「イフ・フレーは中国—ロシア商店によって囲まれ」、「イフ・フレーとナイマー（商売——引用者注）の場所は1つになった」（Dügersüren 1999: 40）と述べ、「イフ・フレーは中国—モンゴル間の交易拠点となったうえで、ロシア—モンゴル間の交易拠点となり、交易都市となった」、「交易都市の誕生という出来事はモンゴルの生活における新たな現象となり、都市民（都市の人々）を誕生させた」（Dügersüren 1999: 41）と記述している。

このようにドゥゲルスレンは、移動するフレーの定住化と、商業街区の形成に着目しながらも、それを「フレーからホトへ」という物語に整除し、さらに（ここでは詳しく述べないが）それを社会主義時代の革命史観へと収束させていく⁸⁾。彼が語るのは、革命の場としての都市形成の物語であり、その筋書きにおいて移動性が、都市化によって失われることは運命づけられている。

もちろん、このような歴史叙述が出来事を語る唯一の語り方ではないことは言うまでもない。では、「フレーからホトへ」という単線的な接続ではなく、フレーとホトの間を語る別の語り方が可能であるとすれば、それはどのようなものだろうか。ここではドゥゲルスレンとは全く異なった仕方、フレーとホトの出会いを物語るナツァグドルジ(1906-1937)の短編小説「ラマの涙」をとりあげたい。

ナツァグドルジは、モンゴル近代文学の父ともされる人物で、モンゴル国においてもっとも有名な作家といっても過言ではない。ここでとりあげる「ラマの涙」は1930年に書かれた作品である。

「ラマの涙」の冒頭は、ガンダン寺の丘を下ってきた僧ロドンが、西ダムノールチンから出てきたユイ・バイホアという漢人の女と偶然出くわす場面から描かれている⁹⁾。

まず、歴史、地理的情報を簡単に整理しておこう。イフ・フレーの東西にダムノールチンという商業街区が形成されたことはすでに述べた。ダムノールチンの名はナイマー・ホトからフレーに通う漢人商人たちが天秤棒(ダムノール)を担いでいたことに由来するという。イフ・フレーの東側に位置するナイマー・ホトとイフ・フレーの間に東ダムノールチンが形成され、イフ・フレーの西側に位置するガンダン寺とイフ・フレーの間に西ダムノールチン街区が形成された。

1778年以降定住化していたイフ・フレーは、19世紀半ばに、最後の2度(1往復)の移動を行う。1838年に小規模な移動を行い、1855年に再び、1778年から1838年まで位置した元の地へと戻ってくる。ガンダン寺が建立されたのは、この間の1838年である。1855年以降に、フレー、ダムノールチン、ガンダンという物語の舞台が形成されることを考えると、物語の時代設定は、イフ・フレーが元の地に戻った19世紀半ば以降であることになる。

フレーの法会に向かうため、ガンダン寺の丘から下りてきた僧ロドンと、阿片が切れたため、指輪を洋銭にかえるために、西ダムノールチンの泥でぬかるんだ「通り(ゴツダムジ)」から出てきたユイ・バイホアとが出くわす、というのが物語の冒頭の場面であった¹⁰⁾。

女は、母が病気であると僧をだまして、西ダムノールチンの家に連れて行く。「夏の間、西ダムノールチンの5本の通り(ゴツダムジ)は泥でぬかるみ、その悪臭は1万束の線香をたいても消せないほどであった」という。僧ロドンは崩れた土造りの家(シャワル・バイシン)の間のせまい隙間を通りぬけて、女の家(シャワル・バイシン)へと

ついて行く。仮病の母への読経が済んだあと、女は僧を誘惑して一夜を共にする。僧ロドンは、その後、女の家に足繁く通うようになり、「西ダムノールチンとガンダン寺の丘の間に小さな新しい道（ザム）が開かれた¹¹⁾」という。さらに、ロドンはガンダンの家（ハシャー・バイシン＝囲いつきの家）と、ガブシという高い位を得るために準備していたものをかき集めて、ユイ・バイホアに美しい家（ハシャー・バイシン）を与えて、俗人街区に共に住むようになった¹²⁾。しかし、ユイ・バイホアはロドンを愛してはおらず、新居においてユイ・バイホアが恋人と愛しあっているところに、ロドンは出くわしてしまふ。ロドンはユイ・バイホアを問い詰めるも、逆に家から追い出される。訴えようとも考えるが、戒律を破っている身ではどうしようもない。行くところのないロドンは涙を流して、ただただ捨てないでくれとユイ・バイホアに家の外から敷居越しに懇願する。以上が作品の要約である。

ここには、フレーという1つの価値の崩落が描かれている。実際このテキストは、社会主義時代、封建的な宗教支配に対する批判として読まれていたという¹³⁾。

作品を通じて、宗教的空間であるガンダンとフレーに対し、俗なる空間、汚れた空間としての西ダムノールチンが、また、心優しく、騙されやすい（故に物語の後半、俗世へとまみれてゆく）僧ロドンと、狡猾で老練な漢人女性ユイ・バイホアが対比的に描かれている。そして、その物語空間において、フレーの崩落は、ダムノールチン（商業街区）との連絡によって表現されて行く。

ロドンは商業街区の通り（ゴツダムジ）で、ユイ・バイホアと出会い、ガンダンの家やフレーでの位階を上げるために積み上げてきた全てを投げうって、女をそこから連れ出し、ハシャー・バイシン（＝囲いつきの家）に共に住もうとする。しかし、結局、女に裏切られ、逆に家から追い出され、敷居越しに捨てないでくれと涙を流して懇願するはめに陥る。

ドゥゲルスレンがフレーにおける商業街区の形成を、将来の「革命」へ向けての都市化の萌芽として捉えているのに対し、ナツァグドルジは、僧侶と女の出会いを通して、それをフレーの、あるいはフレーを中心とする仏教的、伝統的な価値の崩落として、アレゴリカルに描き出している。

たしかに、社会主義時代のモンゴル人たちが評したように、このテキストを墮落した宗教に対する批判として読むことも不可能ではない。時代がそういった読解を要請していたことも理解できる。ただし、上述のドゥゲルスレンのテキストが1956年、戦後の社会主義建設期に書かれたものであるのに対し、この「ラマの涙」が建国後、いまだ行く先の定まらない1930年に書かれたものであることには注意が必要であろう。ドゥゲルスレンが移動するフレーの（露清間交易路における）定住化、交易都市化を蝶番として、物語を「革命」へと展開しようとするまさにその場所に、ナツァグドルジは留まり続けている。そして、そのナツァグドルジが留まり続けた場所、ロドンがユイ・バイホ

アと出会い、また出会えなかった場所（ガンダン→西ダムノールチン→俗人街区）、あるいは、ロドンが家から追い出され、涙を流した家の外の「敷居」の場所こそが、本稿において、私がストリートと呼ぶ場所なのである。

2.3. ウランバートル市の建設——人口統計と都市計画

ナツァグドルジが描いたようなストリートの顕在化、すなわちフレーとホトの「間」の露見は、あくまで過渡的な現象であり、それは20世紀の国家建設と社会主義化の流れの中で、かつてのようなストリートとしての形態を維持することは出来なかった。

この節では、まず、20世紀前半においてフレーが解体し、ウランバートル市が建設される際の、その置き換えのプロセスを、モンゴル人民共和国建国前後の2つの統計資料の差異から浮き彫りにする。続いて、節の後半では、ウランバートル市への都市計画の導入と社会主義化の進展をとりあげ、社会主義期の都市空間からポスト社会主義期のストリートが出現する道筋を確認しておきたい。

(1) 2つの人口統計：まず、モンゴル人民共和国の建国前後の2つの人口統計からみてみよう。1つ目の統計は、モンゴル人民共和国建国以前の1918年に、ボグド・ハーン自治政府がロシア人研究者マイルスキーに公式に依頼して行った、初めての国家規模での人口、家畜統計調査である¹⁴⁾。マイルスキーの調査によると、1919年当時の「ウルガ」（ロシア語でイフ・フレーを指す）の人口はおよそ10万人で、そのうちロシア人が3千人、ラマ僧を含むモンゴル人が3万人、中国人が6万5千から7万人を占めていたという（Maiskii 2001: 123）。2つ目の統計は、人民共和国建国後のもので、それによると、1927年までにウランバートル市の住民票を給付されていたのは510世帯、1,497人にすぎず、一時居住者も4,321世帯、11,533人だという（Department of Statistics, information and research of Ulaanbaatar 2004: 22）。

この1919年の「ウルガ」のモンゴル人人口3万人と、1927年のウランバートル市民の人口1,497人（一時居住者をあわせても13,030人）という2つの数字のずれは何を意味するのだろうか。まず気になるのは、2つの統計が調査の対象とした都市の名称の違いであろう。前者は「ウルガ」を、後者は「ウランバートル市」を対象としている。

「ウルガ」はマイルスキーにとって、都市であった。彼はウルガを（最も代表的な）「寺院都市」にカテゴライズし、その印象を「とても奇妙で両義的」だと述べている。

一方において、中国的な建築様式や、ゲルの形の寺院、帽子をかぶり、数珠をにぎった数千のラマたち、華やかに着飾った商人たちと、泥で薄汚れた市場、それぞれに数件ずつゲルが建てられたハシャー（「囲い」、または「囲われた敷地」——西垣注）と、多くの扉が開かれた細い街路。それぞれ異なった色の服を着、帯に短刀を差して馬にまたがるモンゴル人男性と、銀の髪飾りをつけ、丸く髪を結ったモンゴル人女性、背中に荷を背負いゆっくり歩くラ

クダの隊商、黒く長い服を着た数千の中国人。漢字とモンゴル文字で看板をかかげた中国人の小店舗。あちこちに坐って用を足している男女。様々な種類の犬。ゴミの堆積や泥地のよどみ、悪臭。これらはすべてフレーの一面をあらわしているようだ。これらすべては疑いなく東洋的なものである。これらはわれわれが小さな頃「千一夜物語」から学んだ、想像力を刺激し、多くの色彩の調和された現在の東洋なのだ。

他方で、通りには電信所、電話線、自動車、印刷工場、ロシア建築の建物、ロシアの小店舗や商店、ロシア薬局、ロシアの馬車、ロシアの貨幣、ロシア人の顔、ロシアの多彩な衣服。これらはまさに西洋である。これらは近しい、親しい、そしてなじみのある真の西洋的なものである。

ウルガとは何か純粋な、完全な美をそなえたものであるかと言えば、そうではない。そうではない！ここでは西洋と東洋とが遭遇している。ここではアジアとヨーロッパが奇妙な仕方ですれ違っている (Maiskii 2001: 123, 124)。

ここでマイルスキーは極端にオリエンタリスティックな立場から、西洋と東洋の遭遇、混淆をみている¹⁵⁾。ここで彼のいう「寺院都市」ウルガに、フレーと買賣城 (ナイマー・ホト)、あるいはダムノールチンが含まれているのは明らかであろう。マイルスキーは1919年の「ウルガ」の人口10万人のうち、モンゴル人は3万人で、そのうちラマ僧は約2万人であったと述べている (Maiskii 2001: 123, 127)。それに対して、8年後の1927年のウランバートル市の人口統計はどうだろうか。

1925年にモンゴル人民革命党中央委員会の代表者会議において、ウランバートル市の住民票を給付されるべき「正式なウランバートル市民 (hotyin jinkhen hari'yat)」の定義について議論がなされ、「ホト (ウランバートル市のこと——西垣注) に恒常的に居住し、田舎に家を持たないもの」が正式なウランバートル市民であるとされた (Department of Statistics, information and research of Ulaanbaatar 2004: 22)。2つ目の統計はこの基準に基づいたものである。つまり、人民共和國建国後も、いまだフレーに帰属していた多くの僧侶たちは「正式な市民」はおろか、「一時居住者」にも含まれていないのである。

この建国後の統計が示しているのは、マイルスキーのいう混淆的な領域から、新たに「都市」と呼ばれる空間が区別され、その空間からフレーが締め出されているということである。このとき、ホトはもはや (ナイマー・ホトのような) 中国式の「都城」とは異なった新たな意味で用いられている。もちろん、それが遊牧的意味でのホトではないことは言うまでもない。

こののち、ホト=都市のぬき去られた残余としてのフレーは、かつての中心的地位を失い、単なる「寺院」として位置づけられることになる。政治的コンテクストにおいては、この純化のプロセスは政教分離政策としてあらわれ、神権政治復活阻止の名目で寺院への監視が強まっていく。寺院や上級僧侶の私有財産には高額な税金が課され、下級僧侶やフレーに帰属した属民達は「解放」され、「正式な市民」が増加していく。

1930年代後半の「右派」粛清時代 (ソ連でいうスターリン時代) において、このプ

ロセスは最も苛烈に、あるいは歪んだ形で現れることになる。1937年にかつてのイフ・フレーの寺院は解体され、現時点で分かっているだけでも、全国で17,612人のラマが肅清されたとされている¹⁶⁾ (ラマ以外も含めた全体では28,185人。両数値は肅清博物館内の資料より)。1937年当時771あった寺院のうちの760が、1938年に閉鎖されている (モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988: 378)。

(2) 都市計画と「ゲル地区」の形成：このようにして始まったウランバートル市の建設は、第2次世界大戦後、ソ連の援助による都市計画にしたがって、社会主義都市として整備されていく。しかし、20世紀後半、ウランバートル市の人口は、都市計画の想定を上回って増え続け、都市計画に基づいた住宅供給は人口増においつかず、その結果、市の周縁部に「ゲル地区」と呼ばれる地区が形成されていく。このゲル地区の拡大という現象が、次節で扱うポスト社会主義のストリートについての考察において重要な位置を占めることになる。

ゲル地区における典型的な居住形態は、ハシャー (「囲い」、あるいは「囲われた敷地」という囲いを単位として、その中に、ゲルのみが建てられたもの、ゲルと固定建造物 (バイシン) が併設されたもの、あるいは近年では、建造物のみが建てられたものなどが見られる。「ゲル地区」と呼ばれているからといって、必ずしもゲルのみに住まわれているわけではない。

このハシャー自体は非常に古くから存在し、先に引用したマイルスキーの20世紀初頭のウルガについての記述の中にもあらわれる¹⁷⁾。つまり、1924年の「ウランバートル市」の成立以前からゲルをハシャーで囲む居住形態は一般的なものであった。しかし、このような、ハシャーという居住形態の成立が、ただちに「ゲル地区」の誕生を意味するわけではない。

「ゲル地区」の形成というコンテキストにおいて、もっとも注意を払うべき出来事はウランバートル市における都市計画の導入である。1954年にはウランバートル市の第1次総合都市計画が、つづいて1961年には第2次総合都市計画が計画された。このうち後者において、「地区」(horoolol) という概念がはじめて導入される¹⁸⁾。歴史家イドシンノロフは「新たな総合都市計画 (第2次総合都市計画のこと——西垣注) を以前のものと区別する原理的な違いは、アパートを建設する際、それぞれが文化、生活、商業、食料計画などのすべての面のサービスを備えた19の小さな地区によって計画された点である」と述べている (Idshinnorov 1994: 133)。つまり、この「地区」とは、社会主義時代の再分配のシステムの、居住の分野における具現化とでも言うべきものであった¹⁹⁾。

さらに1975年の第3次総合都市計画にともなう「新地区」(3地区、4地区)の高層アパート群の建設によって、多くのハシャーが「地区」の外部へと移転し、「ゲル地区」が現在のかたちへと形成されていく。

ここで注意しておきたいのは、この「ゲル地区」が、「地区」の反転像として、あるいは地区ではない地区として、事後的に誕生した領域だという点である。20世紀前半、ホト（都市）の建設に際して、フレーが排除され、田舎から切り離された「真の市民」が住むホトが目指されたように、ここでは、理想的なホトから「ゲル地区」が排除されている。

しかし、ここで忘れてはならないのは、われわれが目目してきたような移動性、ストリート性が、そもそもこのような都市建設に先行しているということ、つまり、「地区」と、その反転像としての「ゲル地区」という区分自体が、前節まで見てきたような移動性、ストリート性——必ずしもストリートという形態で顕在化するとは限らないが——に依拠しながら、それを二項に配分することによって成立していることである²⁰。あるいは、もし「ゲル地区」を「地区」の反転像と言うならば、ストリート性に着目するわれわれにとってみれば、そこにはいわば二重の反転があることになる。

では、社会主義時代のこの二重の反転の下で、都市計画の目指すユートピア的な理想像の似姿としての「地区」と、その残余としての、そして、いつかは「地区」へと置き換えられるべき不完全な地区としての「ゲル地区」とに二分された都市空間は、かつてのような移動性、ストリート性を完全に失ってしまったかのだろうか。二重の反転は完成し、都市計画家たちが求めた通り、ゲル地区の排除は成功したのだろうか。

結論から言えば、社会主義体制の崩壊した90年代以降、特に90年代後半から現在に至るまで、首都への人口流入は加速的に増加し、「ゲル地区」は消滅するどころか、むしろ拡大している。2007年の統計調査によると、ウランバートル市の人口は100万人を突破したというが、そのおよそ6割がゲル地区に居住するとされている。次節では、この、社会主義から市場経済への移行期において先鋭的にあらわれ、そして今なおわれわれの現在を構成しているポスト社会主義のストリートをとりあげる。

3 ポスト社会主義期のストリート

3.1 市場経済への移行

社会主義体制の崩壊した1990年代、モンゴル国は、私有化＝民営化、市場経済化の名のもと、急激な変化に直面した。特に、1990年代初頭には、IMF、ADBの主導によって、「ショック療法」とも呼ばれる、市場経済化を急速に進める路線がとられたことにより、社会主義時代の公的部門は解体され、失業者は増加し、経済は混乱した。多くの国営企業がバウチャー（クーポン券）方式で民営化されたものの、急速な市場経済化に、制度も人々も、うまく対応しきれなかった。結果として、人々はストリートへと放り出され、インフォーマルセクターが拡大していくことになる。

しかし、1990年代の後半以降、事態は変化をみせる。一方で、私有化、市場経済化

が引き続き、徹底的に押しすすめられたものの、他方で、貧困問題や、セーフティネットの拡充に配慮した開発援助が徐々に増加して行く。例えば、1996年のアパートの私有化や、2003年の土地の私有化は前者の成果である。後者に関しても、当初は、IMF、ADBの主導する「小さな政府」が直接関与するというよりは、むしろNGOの果たした役割が大きかったが、その後、国際援助機関も政府と連携して、徐々に関与を深めて行く。

ここで注目したいのは、国際援助機関やモンゴルの市場経済推進派が、インフォーマルセクターに対してとった態度に関してである。モリス・ロッサビによると、1990年代半ば、国際援助機関は、インフォーマルセクターの拡大を「経済発展を推進するエンジン」として、また、モンゴル政府内の市場経済推進派も「起業精神がある」として、肯定的に評価していたという²⁰（ロッサビ2007:115,134）。しかし、特に2000年代以降、インフォーマルセクター、あるいは「影の経済」に対する規制を求める声が高まっていく。

以上のような、プライベート化の流れと並行して、本稿が注目するのは、首都への人口集中である。統計によると、1990年のウランバートル市の人口は約56万人であったが、2007年には100万人を突破している。そして、このような増加した人口の受け皿となっているのが、前述の「ゲル地区」なのである。

3.2. 新たな都市計画と土地私有化

プライベート化と、それにとまなうインフォーマルセクターの拡大、首都への人口集中と、それにとまなう「ゲル地区」の拡大。ポスト社会主義期のストリートを考察する際、本論が特に注目するポイントはこの2点である。しかし、このようなポスト社会主義期に新たに生まれた状況が、全く放置されてきたわけではなかった。90年代後半以降は、特にNGOやUNDPなどの国際機関の援助によって、貧困問題、環境問題が問題として認識されるようになり、多くのプロジェクトが進められている。この節では、以上のような状況を「問題」として捉え、それに対処しようとする2つの制度的枠組みをとりあげることによって、ポスト社会主義期のウランバートル市の空間編制を浮き彫りにし、次節におけるストリートをめぐる考察の準備としたい。

(1) 新たな都市計画：1つ目の枠組みは「新たな総合都市計画」である。1998年、ウランバートル市の「新たな総合都市計画」の準備のため、「都市計画研究所」が首都行政の付属機関として発足した。1990年代前半の混乱期において、かつての総合都市計画は完全にストップしていた。

先にみた社会主義時代の一連の都市計画が、モスクワの都市計画研究所（Giprogor）の手によるものであったのに対し、この新たな総合都市計画はモンゴル人が中心となって立ちあげたものである。

この新たな総合都市計画の正式名称は、「首都・ウランバートル市を2020年まで発展させる総合都市計画 (Niislel Ulaanbaatar hotyig 2020 on хүртөл höгжүүлэх үүрэнхий төвлөгөө)」というもので、2000年から2020年までの20年間の計画である。この計画が、2002年に政府に承認されたことにより、その後、研究所では、この総合計画に基づいて、「断片化された総合計画 (Hesegchilsen үүрэнхий төвлөгөө)」と呼ばれる、市のそれぞれの区画に対しての具体的なプランが立てられていった。

問題は、この「新たな総合都市計画」における、ゲル地区の位置づけである。というのも、社会主義時代の総合都市計画と同様、このポスト社会主義期における「新たな総合都市計画」においても、都市においてゲル地区が占めるべき場所はないのである。

この計画の立案に参加した都市計画家によると、ゲル地区をなくすべき第1の理由は「環境問題」であるという。ゲル地区の「炉」から排出される煙がウランバートル市の大気を汚染している第1の原因であることが問題視されている。都市計画家は「社会主義時代の都市計画は、経済的な要因を考えずに自然にゲル地区がなくなると考えていたが、実際にはゲル地区は広がった。新たな都市計画では計画実現のため、外国資本の導入によって、ゲル地区を減らしていかなければならない」と私に語った。

ゲル地区を撤去するために、新たな都市計画が選んだ具体的な戦略は、都心に近いゲル地区は郊外に移転させて、代わりに高層アパートを建設し、郊外のゲル地区も低層アパートに変えていくというものである。アパート群にはセントラル・ヒーティングのシステムによって「暖」が提供され、「炉」は必要なくなる。

社会主義時代の都市計画において、「ゲル地区」は消滅すべき存在ではあったものの、その「排除」は決して徹底されたものではなかった。「地区」と「ゲル地区」は隣接していたし、撤去されたハシャーも、都市の周縁部に移動するだけであった。それが市場経済化の今日、国際援助期間と外国資本の手を借りることによって、今度は（ソ連の手ではなく）自らの手で、市場経済にふさわしい都市計画を実現するのだ、と都市計画家は考えている。

しかし、現在急速に進んでいく外国資本や合弁会社による高層アパートの建設や、居住区の開発は、必ずしも2000年のマスタープランに沿ったものではなく、現在、この総合計画自体が見直しを迫られている。

(2) 土地の私有化：第2の枠組みとして、ここでとりあげるのは「土地の私有化」である。モンゴル国では2002年7月27日に、「モンゴル国の市民に土地を所有させることについて (Mongol Ulsyin Irgend Gazar Öмчлүүлэх Тухай)」(以下「土地私有化法」と略す)が承認され、翌2003年5月1日に施行された。

この法律は、モンゴル国の市民が1)「家族」で利用するため(主に居住)か、あるいは、2)産業目的で土地を「所有」することを認めるものであり(4条1)、特に家族

利用の場合、首都で 0.07 ha、県の中心地で 0.35 ha、郡の中心地で 0.5 ha を限度に一度限り無償で供与することを定めたものである²³⁾ (7 条 1)。

この土地私有化法が施行されるまで、モンゴルの土地は国有であり、市民に許されていたのは「占有²³⁾」, 「利用」といった処分権のともなわない権利形態のみであった²⁴⁾。

ここで重要なのは、この法においては、第 1 に、所有の主体がモンゴル国の「市民」であり、土地切片は無償で与えられること（つまり、法人などへの有償供与は、後回しにされていること）である。ただし、一定の無償供与期間をこえると、土地の取得は有償となる。当初、この無償期間は 2005 年 5 月 1 日までの 2 年間とされていたが、私有化は思いのほか進まず 2008 年まで 3 年間延長された。

そして、第 2 に、牧地など共有地の私有は認められておらず、現段階において私有可能な対象となっている土地は国土の 1 パーセントにも満たない、ということである。都市近郊における家族利用目的に限った場合、私有化の対象となる土地は事実上ゲル地区のハシャー（囲い）か、あるいは主にアパート居住者が都市近郊に建てるゾスラン（＝都市近郊の避暑地。元来は「夏营地」を意味する）のハシャーに限定されることになる。実際、ウランバートル市では、2003 年からゲル地区の、2004 年以降はゾスランの私有の手続きが開始された。

この 2003 年の土地私有化法に結実する、一連の土地私有化政策には、主に ADB が主導的な役割を果たしていたと言われている。例えば、1997 年に成立した「土地料金に関する法」、「不動産登記に関する法」、「測地、作図に関する法」など関連法規の整備への関与（ADB 2002: 5）、そして「地籍図と土地登記」プロジェクトや、「地籍図と土地登記の能力強化」技術協力プロジェクトなどの支援プロジェクトの実施が挙げられる（ADB 1999; Tserenbaljir and Naranchmeg 2004: 232; Amarsanaa 2005: 19-20）。

特に「地籍図と土地登記」プロジェクトは土地の私有化を実現するためには、必須の案件であった。このプロジェクトは ADB から 990 万ドルの借款を含む、総額 1270 万ドルの大規模なプロジェクトで、2001 年から 3 期 6 年にわたって実施される（ADB 1999: 17）。具体的な内容は GPS を利用した地籍図の作成と、そのデータベース化である（ADB 1999: 14）。そして、その第 1 期（2001 年から 2002 年まで）において、まずウランバートル周辺の地図が作成された。

それによって、衛星写真を用いて「ハシャー（囲い）」に囲われた土地切片が同定可能となり、そこに GIS（地理情報システム）によって、所有を申請する市民およびその家族のデータを書き込むことが可能となった。こうして、2003 年の土地私有化法の施行へ向けての準備が進められていった。

土地管理測地作図局長のバツスフの報告によると、2005 年 6 月 25 日現在、ウランバートルにおける土地所有の状況は、それまで占有、利用していた土地を家族用途で所有したものが 50,240 名、新たに家族用途で所有したものが 1,260 名、合計で土地を所有

したものは51,500名。そのうち土地を登記所で登記し、権利書を取得したものは10,802名で、ウランバートル市で土地を所有したもののうちの20.9パーセントにあたる。さらにそのうち所有した土地を担保として融資を受けたものは2,932名だという（Batsükh 2005: 10）。

バトスフは今後の展望として、「土地を全面的に経済的流通に乗せ、国家の発展、人々の生活の向上に貢献する」ことを政府の目標としてあげている（Batsükh 2005: 13）。しかし、ゲル地区において「影のビジネス」（Batsükh 2005: 6）と呼ばれるハシヤーのやり取りが横行するのに対し、「正式な」土地の流通は、いまだ端緒についたばかりである。

以上、2つの枠組みについてみてきたが、ここで問題となるのが、先にみた「新たな都市計画」と、この「土地の私有化」という2つプロジェクトが実際に運用される際、両者の方針に真っ向から対立しあう点が含まれているということである。前者が究極的にはゲル地区を排除しようとしているのに対し、後者は「ハシヤー」の所有権を確定することによって、逆にゲル地区の定住化を進めようとしている。実際、都市計画家は、土地の私有化によって、ゲル地区のハシヤーの立ち退きが困難になったと言う。

社会主義時代以来、一定領域内の全面的な計画都市化を夢みる都市計画は、都市の境界に位置する「ゲル地区」をクリアランスし、都市の内／外の区分を明確化することによってその理想を実現しようとしてきた。それに対して、一連の土地私有化政策は、これまで不明明であったゲル地区内の土地の所有関係を明確化（データベース化）し、断片化された土地切片と、その切片ごとに記載される「市民及びその家族」を管理することによって、都市計画的な空間的配置に依存しないかたちで、ハシヤーに住まう家族単位の管理体制を敷こうとしている。つまり、前者がゲル地区を排除することによって、理想を実現しようとするのに対して、後者は、都市を編制する原理を転換することによって、ゲル地区を新たな都市の内部へと包摂しようとするのである。

以上のように、制度的な次元において緊張関係をはらむ、このような、排除／包摂という空間編成の様式は、住民の生において、どのように作動しているのだろうか。次節において、具体的な2つの事例をとりあげる²⁵⁾。

3.3. 2つの移動性——ポスト社会主義期のストリート

以下にとり上げる2つの事例は、2004年から2005年にかけてウランバートル市において行った調査に基づくものである。数値等に関しては当時のものをそのまま用いている。

●事例1：ゲル地区からアパートへ——ハンドマーの場合

ハンドマー（42歳、女性・仮名）は現在ゲル地区の住民ではない。ウランバートル

市の中心部からやや南に位置するアパートの居住者である。夫と4人の息子と1人の娘と同居している。1990年にウランバートルに出てきた当初、彼女はゲル地区に住む母（75歳）のハシャー（囲い）にゲルを建て、同居していたが、その後、数度の転居を経て、現在のアパートを購入した。

モンゴルの西部に位置するオブス県の中心地の出身の彼女は、同じくモンゴル西部に位置するホヴド県で大学を卒業したのち、当時の社会主義青年同盟の斡旋で、南ゴビ県の中学校で生物の教師をしていた。そこで小学校の教師をしていた夫と知りあい、結婚し、子供をもうけた。

結婚から数年後、夫の母が病気になったため、夫の故郷（ボルガン県）へ移り、夫婦で教師を続けながら、4年間暮らしたのち、1990年にウランバートル市に出てきた。彼女は、再び中学校の教師の職につくことができたが、夫は新聞売りになった。

ハンドマーは、その後3年間教師を続けたが、やがて、経済危機で給料がストップしてしまう。当初はタバコ売りのサイドビジネスをしてしのぐも、生活は苦しく、結局彼女は、給料の支払われなくなった教師をやめ、通りで古本の露天商をはじめた。タバコと古本では稼ぎが全然違ったからだという。夫はタクシー運転手になった。

元教師であった彼女には、古本の仕入先のコネクションがあり、彼女の露天商のグループは拡大していく。もちろん苦労もあった。通りに面したバーの経営者とのトラブルに巻き込まれ、区から数度、移動を命じられている。2000年以降、彼女たちのグループは、通りから追い出され、川沿いの空き地で商売をするようになる。

ハンドマーは6人兄弟で、兄1人、姉2人、妹1人、弟1人（姉1人は死去）がいる。彼女達兄弟は、母の家の家事の手伝いから、子供（や孫）の世話など、行き来が頻繁にある。この時点（2004年）では、兄が母と同じハシャーに住み、それ以外の兄弟も、弟が韓国に出稼ぎに行っている以外は、みなゲル地区に住んでいた。

しかし、2005年、ハンドマーの援助によって日本に出稼ぎに行っていた姪（姉の娘）が日本人と結婚したのを期に、姉一家は新築のアパートへと引っ越し、自分の住んでいたハシャーを別の親族に譲った。

2005年は、それ以外にも転機があった。露天商のリーダー的存在であった彼女が社長となり、会社を作ったのだ。まず、金を借りて、資材を買い、自分達（彼女の家族の他、仲の良い数家族のコアメンバー）で川沿いの土地に建物を建てた。土地利用の登録を会社で行い、利用料も、それまで書類上は、個別で区に支払われていたのを、会社で一括して支払うようになった。そして、彼女が仲間たちから、利用料を徴収するようになった。会社を作って何が変わったかと聞くと、彼女は笑いながら2点、暑い日や寒い日に外にでる必要がなくなったことと、彼女の一家の収入が上ったことを挙げた。

●事例2：ゲル地区からゲル地区へ——ドルジの場合

ドルジ（52歳、男性・仮名）は、ウランバートル市の北部に位置するゲル地区から、2004年春に現在の市北西部のゲル地区へと越してきた。それ以前も市内のハシャーを転々としていたという。引っ越してくる前は月に5,000トゥグルグ（約500円）を払って、人のハシャーにゲルを建て、そこに一家で住んでいたが（賃貸契約）、知り合いから空いている土地を紹介してもらったので、移ってきたという。

ドルジの一家は妻と娘1人、息子3人である。このうち実子は末の息子だけで、あとの子供は妻の前夫の子供である（前夫は死去）。娘は婚出し、真ん中の息子は妻の親戚に養子に出された。2004年夏、私が初めて彼のゲルを訪ねたとき、ちょうど、夫婦と2人の息子、長男（20歳）の恋人の5人で1つのゲルに暮らしているとに、婚出した娘とその夫と子供の3人が引っ越しているところであった。ドルジによると新しく土地を手に入れたので呼び寄せたのだという（娘一家3人は市の東側の別のゲル地区に住んでいた）。

このドルジの新たな住まいの特徴は、第1に、新規移住であるため、まだハシャーもなければ、バイシン（＝固定家屋）もなく、ただ1つのゲル（娘夫婦が来てからは2つのゲル）のみに一家が住んでいるという点、第2に、やはり新規移住であるため、都市周縁部のゲル地区のそのまた周縁部の立地条件の悪い谷際の土地しか手に入らなかった点が挙げられる。

ドルジはウランバートルからほど近い中央県の出身で、牧民の家に7人兄弟の長男として生まれた。現在田舎では弟たちが農場を営んでいる。両親はずっと以前に亡くなったという。ドルジ自身、かつては田舎の国营農場（sangiin aj ahui）でトラクターの運転手をしてしたが、1987年に職を失った。彼によると「市場経済（zah zeel）になって全てが変わってしまった」という。1992年からウランバートルに出てきたドルジは、以後タクシーの運転手をして暮らしてきた。しかし、2004年春に車を売ったので、それ以後は、田舎との間を頻繁にいききしながら、季節によって、まちで馬乳酒を売り歩いたり、門番の仕事をしたりしている。私がはじめて彼と出会ったのも、ガンダン寺から東へと下る坂の袂で、彼が馬乳酒を売っているときであった。

ドルジは、近い将来ハシャーとバイシン（固定家屋）を建て、来年結婚する（妻の）長男とその恋人をそこに住まわせ、みんなでひとつのハシャーに住むのだ、と夢を語る。しかし2004年冬になってもハシャーが建てられる気配はない。夏から秋にかけて2ヵ月間、妻の田舎のヘンティ県に行っていたので、作業ができなかったのだという。その間に娘一家はまた市の東側に引っ越してしまった。再びゲルは1つだけになった。

2005年7月にドルジの家を訪ねると、すでにそこにはドルジはいなかった。そこにはドルジの（妻の）長男とその恋人が2人で暮らしていた。来年子供が生まれるが、まだ結婚はしていないという。ドルジは妻と共に、同じ区のゲル地区に住む実の妹のハ

シャーに引っ越していた。

8月になると、長男はついにゲルをハシャーで囲いだした。ゆくゆくはバイシン（固定家屋）も建てるつもりだと言う。将来ハシャーの番犬にすると行って、近所に生まれた子犬ももらってきた。ハシャーが完成すれば土地所有の申請も可能になる。ただし、その場合、長男たちは正式には結婚していないので、土地は誰か他人の名義になることになる。

しかし、その秋、市場で働く長男は、妊娠中の恋人を残して、母の田舎のヘンティ県へと2ヶ月間、市場で売る果物（ベリー類）を摘みに行き、ハシャーの建設は途中で投げ出されたままになった²⁰。

ハンドマーもドルジも、1990年代初めに、ウランバートル市に移住して来た。両者は共に、その移住の前後に体制移行、経済混乱に直面し、社会主義時代には機能していたシステムから放り出され、生活の糧を求めてストリートへと出るはめになった。移住当初「ゲル地区」を転々としていた点も、両者に共通している。

しかし、両者のその後の移動の仕方は大きく異なっている。事例1のハンドマーが、数度の引越しを経たのち、1990年代半ばにゲル地区を出て市の中心部にアパートを購入し、2005年には路上での商売をやめ、会社を組織して、建物のなかでの商売に切り替えたのに対し、事例2のドルジは、都市と田舎との間を行き来しながら、その後もゲル地区を転々とし、路上での商売を続けている。

両者の違いは相対的な豊かさの違い、という一言で片付けてしまうこともできるのかもしれない。しかし、ここで注目したいのは、両者の移動の仕方の違いとストリート性との関係である。事例1のハンドマーの移動はゲル地区から都心へ、インフォーマルセクターからフォーマルセクターへ、という明確な志向性をもつものに対して、事例2のドルジの移動はある種の不確定性をはらんでいる。

ゲル地区を転々としていたドルジは、2004年、知り合いの紹介で新たな土地に移動した。この移動には2003年の土地私有化法の施行が明確に影響している。ただし、彼は土地を正式に所有するために、それほど積極的に動くというわけではなかった。ハシャーを立てるでもなく、所有の申請の手続きに入るでもなく、都市と田舎の間を行き来し、田舎の親族に依存しながら都市生活を営んでいる。ハシャーを囲い、家を建てることは将来の目標として積極的に語られるが、ウランバートル市で市民権を登録し、地籍図に情報を記載し、所有を申請し、土地を取得することは、都市への居住を確保する上でのゴールとしてそれほど明確には語られない。ここではハシャーが、必ずしも私有の単位としての「囲い」として、一義的に捉えられているわけではない。

ハンドマーの移動の分かりやすさ、ドルジの移動の不確かさは、先に言及したプライベートタイゼーションのプロセス（3章1節）、あるいは、土地の私有化という制度的枠

組み（3章2節）と共に考えると理解しやすい。1990年代に市場経済化が開始されたのち、旧国有財産の払い下げが開始された。ハンドマーの一家がアパートを購入した1990年代後半は、アパートが例外的に安価に払い下げられた時期である。それに対して、ドルジが土地を得ようとして移動した2004年は、私有化政策がもう一段進み、土地が対象になった時期と一致する。つまり、ハンドマーが市場経済化の流れに乗って、自己を調整しながら、市場経済のプレイヤーとして、安定した地位を築いていったのに対し、ドルジはその流れに乗らなかったがゆえに、その後の、よりきめ細かな私有化政策のターゲットとなったとも言える。前者が、積極的に市場経済のプレイヤーを育成しようとする流れに乗ってゲームに参入したとすれば、後者は、いまだゲームの楽しみ方を知らないプレイヤーに対して、我慢強く開かれている門の前にたたずんでいるかのようである。

4 結論にかえて

ブラヴォイとヴァーディリーは、ポスト社会主義圏における「移行」を考える際、これまで、「第2の大転換」という認知地図によって、国家と経済のマクロな構造に焦点があてられる一方、日々の生活のミクロな世界がほとんど省みられなかった点を批判したのち（Burawoy and Verdery 1999: 1）、自分達の研究を次のように位置づけている。

「ちょうどカール・ポランニーが19世紀半ばの市場の拡大に対するコミユナルな抵抗を分析したように、20世紀の末、我々はポスト共産主義社会においてそれと同様の市場に対するコミユナルなリアクションを目撃する——選択的流用、何ともいえない即興、あからさまな抵抗、新たな闘争の領域の生成。どちらのケースにおいても、コンテクストとなっているのは、バーターから、交易、グローバル金融まで、様々な形態の広大な交換のネットワークへと国々を引き込み、絶えずグローバルな範囲へと増大する資本主義経済の成長である。ポランニーが示したように、このようなネットワークへの包摂は、ある者には豊かさを、他の多くの者には貧困、周縁性、そして近代的な実存の手段からの排除をもたらす。我々の民族誌は、この第二の大転換の出現にともなうミクロなプロセスに光をあてる」

(Burawoy and Verdery 1999: 15-16)。

ポスト社会主義のストリートを考察する本稿にとって、ブラヴォイとヴァーディリーのいう「第2の大転換の出現にともなうミクロなプロセスに光をあてる」ことが、重要であることは言うまでもない。しかし、問題は、そのようなミクロなプロセスが、どのような広がりをもち、どのように世界を構成しているかである。

例えば、社会主義からの移行を彼らのようにみた場合、前節でとりあげた事例1は、資本主義の「交換のネットワーク」へと比較的うまく接続することのできた少数の成功例だと言える。では、事例2はどうだろうか。はたして、それをネットワークからの排

除や、周縁化をとまなう失敗例と言えるだろうか。

社会主義時代の「ゲル地区」についてならば、社会主義的近代の再分配のシステムの具現ともいえるべき「地区」から排除され、周縁化されていた、とすることができるかもしれない²⁷⁾。あるいは、1990年代初頭、「ショック療法」が無理やり進められた時代——われわれの言葉で言えば、ストリートが先鋭的に露見した時代——であれば、かつて周縁化されていた「ゲル地区」やインフォーマルセクターなどのグレイゾーンが、都市へと侵入し、ほとんど全面化していたのかもしれない²⁸⁾。しかし、ここでとりあげた事例2のようなケースは、かつての「ゲル地区」のように必ずしも排除も、周縁化もされていない²⁹⁾。それどころか、むしろ、ブラヴォイとヴァーディリーの言うような「ネットワーク」は、GPSのようなテクノロジーを媒介にして、かつては排除、周縁化されていた「ゲル地区」へと、より深く細やかに浸透しつつある。そこでは究極的には、「ゲル地区」をも内包した新たな都市空間の建設が目指されている。確かに、事例2においてみたような移動は、このようなテクノロジーを介して、「ネットワーク」上に記載され、局所化される直前において、積極的に進むことも退くこともないような曖昧さを含んでいる。しかし、まさにそのような曖昧さをターゲットとして、この新たなテクノロジーは作動しているのである。

自らのハシャーを建てるという行為は、本人の意図に関わらず、土地私有化というプログラムの一階梯へと組み込まれる。ハシャーのもつ可視性が人工衛星から直接捕捉されるからである。しかし、事例2でみたように、ドルジはハシャー（囲い）を建てなかった。息子夫婦はハシャーを建てはじめたが、のちに結局その土地を放棄し、数軒隣に移ってきた妻の親族のハシャーへと移った。都市へと移り住み、ストリートで糧を得ながら、ハシャーを転々とし、自らのハシャーを建てようとしながらも、それを完成できないドルジたち一家は、ブラヴォイとヴァーディリーのいうような「交換のネットワーク」の網の目から完全に逃れているわけではないものの、期待されているほど、うまく接続できているわけでもない。

私有につながる可能性をもちながら、必ずしも私有の単位ではないハシャーを転々とする移動。本稿において注目してきたのはこのような不確かな移動性である。この移動性は、事例1の移動のように、都心へ、フォーマルセクターへ、あるいは海外へというような明確な志向性をもたない曖昧で微細なものにすぎないが、それでも「定住性」とは決定的に異なっている。そして、それは、トランスナショナルな資本主義のネットワークと接続する脱領土化した移動性とは区別されるものの、そのネットワークにつながる可能性を保持し続けているような移動性なのである。

以上のような移動性、流動性に注目することによって、ブラヴォイとヴァーディリーのいう「マイクロなプロセス」を、必ずしも「交換のネットワーク」との接続から排除、周縁化された、個人レベル、集団レベルの実践としてとらえる必要はなくなる。むしろ、

われわれはここまで、ミクロなプロセスの連鎖に定位しながら、そこに発現する移動性、あるいは、ストリート性の形態の変化にこそ注意を払ってきたのであった。そのような移動性、流動性が様々な技術に捕捉され、位置確定されることによって、結果として、管理可能な都市空間と、その正式な住人としての（土地を所有する）「市民」が構成されることになる。

「ミクロなプロセス」を以上のように理解した上で、最後に、われわれが見てきた移動性の変遷を、ブラヴォイとヴァーディリーのいう「第2の大転換」という認知地図に重ねあわせておこう。ブラヴォイとヴァーディリーが、ポランニーの描く19世紀半ばの「大転換」と、20世紀末の「第2の大転換」との同型性を指摘したように、われわれも、プレ社会主義期におけるストリートの浮上と、ポスト社会主義期におけるストリートの再浮上とを記述してきた。しかし、本稿では、彼らのように、「ミクロなプロセス」と「交換のネットワーク」とを対置するのではなく、ポスト社会主義期にあらわれた「曖昧な移動」を、移動性の変遷のうちに位置づけることによって、考察する領野のすそ野を広げている。プライベートタイズされた現在の生を、このような移動性、ストリート性の軌跡のうちに位置づけることによって、われわれの生のもつ可能性の拡がりを経験かでも示せたならば、本稿の目的は果たせたことになる。

謝 辞

本稿の基盤となる調査は2004年7月、10月、11月、2005年7月、8月、2006年3月の期間に行われた。このうち2004年度の調査は、科研特定領域研究「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」（代表者：春日直樹）の、2005年度の調査は公益信託澁澤民族学振興基金の「大学院生等に対する研究活動助成」の助成によって実現した。ここに記して謝意を表する。これらの調査の成果として、すでに私は論文「モンゴル・ウランバートル市におけるトランスナショナルな場の生成」（西垣2007）を発表しているが、本稿は、その論文の立場から、ストリートの人類学の再考を試みた発表（同論文のタイトルに「トランスナショナルな場としてのストリート」という副題を付したものを）、さらに深化させたものである。このような発表の機会を与えていただいた関根康正先生に心から感謝したい。

注

- 1) 言語学者ロブサンバルダンは、現代語では区別される qota や, qoton などの一連の遊牧的語彙が、共通の語源をもつと主張している（Luvsanbaldan 1975: 10-13）。一般にモンゴルでは、このようなホトの遊牧的意味での使用が、「都市」などの定住的意味での使用に先行すると理解されている。
- 2) 正確にはその複数形 qotod, qotad であられる（単数形はそれぞれ qoton, qota）。

- 3) 例えば、『アルタンハーン伝』。
- 4) 『集史』。ここでは本田の訳出を借用した(本田 1991: 7)。また、クリエン(フレ)は先にみた『元朝秘史』においても「圈子」という傍訳で、遊牧集団の単位やその駐営形式の意で頻出する。
- 5) ウランバートル市の「起源」をめぐるのは、社会主義時代／ポスト社会主義時代で評価が異なっており、前者についてはドゥゲルスレンの著作が、後者についてはイドシンノロヴの著作が代表的なものとして挙げられる(Dügersüren 1999; Idshinnorov 1994)。これらのウランバートル市の「起源」をめぐる歴史叙述に関しては、拙稿を参照(西垣 2005)。
- 6) フレーはロシア語ではウルガ(urga)、漢語ではクーロン(庫倫)と呼ばれていた。ウルガはモンゴル語のウルグー(örgöö 文語ではörgüge)の訛ったもの、クーロンはフレの満州語読みをさらに漢字音写したものとされる。
- 7) 後述するように、こののちフレは19世紀半ばに2度(一往復)、小規模の移動を行い、それ以降完全に定住化する。
- 8) 詳しくは拙稿を参照(西垣 2005)。
- 9) ユイ・バイホアはツェレンヒヤムというモンゴル名をもち、漢人であることが特に明記されているわけではないが、物語中で、モンゴル名が出てくるのは冒頭の1回だけであるのに対し、ユイ・バイホアという呼称が継続的に使用されている点、西ダムノールチンに漢人的に居住している点などからも、漢人(あるいは混血)であると理解するのが妥当である。
- 10) この「ゴツダムジ」が、ストリート、街路、通りに対応するモンゴル語である。
- 11) 「ザム」は一般に「道」を指すモンゴル語である。
- 12) ここではホローニー・ガザル(ホローの場所)を「俗人街区」とした。フレの中心寺院のまわりには、本来俗人の住むことが禁止されている僧坊区(アイマグ)があり、さらにその外側に東西の漢人商人街区(ダムノールチン)と、モンゴル人の俗人の居住するいくつかの俗人街区(ホロー・ハルチャード)が存在した。「ホローの場所」とはこの俗人街区を指すと考えられる。ホローもフレと同様、元来「囲い」を意味し、ハシャー(囲い、柵)や、ホト(家畜小屋、家畜の寝床)などとも類義的な側面をもつ。現代語では注19で述べるような、ウランバートル市の行政単位を意味するとともに、「委員会」などの、より抽象化された意味をもつ。
- 13) それに対して、民主化後は性を通しての人間観察の作品として読まれているという(芝山 2003: 305-306)。
- 14) 残念ながら、マイルスキーの統計は、地方に関しては——おそらくは戸籍台帳に基づき——詳細な数字を出しているのに対し、都市(ウルガ)に関しては概数しか出していない。このような自治時代の統計の正確さを疑問視する声もあるが、何れにせよマイルスキーの調査はモンゴル国の統計史(特にその近代的形態)をふり返る際、かならず参照される起点となっている(Mongol ulsyin ündesnii statistikiin gazar 2004: 8-12)。
- 15) 前節で取りあげたドゥゲルスレンは、フレの交易都市化の第1段階として、フレが中国—モンゴル間の交易拠点となったことを、第2段階としてロシア—モンゴル間の交易拠点となったことを挙げていたが、ナツアグドルジの短編がその第1段階に舞台を設定しているのに対し、マイルスキーは第2段階を経たのちのフレを記述している。
- 16) 前出のナツアグドルジも、この間数度にわたる投獄と拷問の後遺症に悩まされながら、1937年に31歳の若さで不慮の死を遂げた。
- 17) あるいは、ナツアグドルジの「ラマの涙」(1930)においてロドンが住んでいたガンダン寺の住居も、またロドンがユイ・バイホアと住むために手に入れた俗人街区の住居も「ハ

- シャー・バイシン」と呼ばれる、ハシャーで囲われた敷地に建てられた家であった。
- 18) ナツァグドルジがブレ社会主義期のストリートを描いた1930年が、フレーを中心とする伝統的な価値が崩落し、いまだ新たな価値が確固たるものとしてうち建てられていなかった時代であるのに対し、ドゥゲルスレンがウランバートル史を体系化した1956年は、まさにこのような都市計画が導入され、社会主義がひとつの形をとろうとしていた時代であるということとは心にとめておいてよいだろう。
- 19) ここで注意すべきことは、この「地区」という単位が行政区分とは異なり、あくまで都市計画的なカテゴリーとして新たに導入されたという点である。現在、首都の行政区分としては「区」(dүүрег)や、その下位区分のホロー(horoo)がある。そのうち、ホローという語は、古くからイフ・フレーの街区を示す呼称として用いられていた。上述のナツァグドルジの「ラマの涙」において、ロドンがユイ・バイホアを漢人商人街(ダムノールチン)から連れ出し、一緒に住むために「ハシャー・バイシン(=囲いつきの家)」を用意したのは、このホローという俗人街区の一角であった(注12参照)。ウランバートルに行政区分が導入された際、当初は「区」に対応する語としてこの「ホロー」が用いられたが、のちに「ライオン(区)」というロシア語をそのまま用いるようになった。その際、「ホロー」は区の下位区分の呼称へと格下げされた。90年の民主化後、ロシア語からの借用語は避けられるようになり、「ライオン」という呼称が廃止され、「区」は現在の「ドゥーレグ」という呼称に変更された。ここで言及した「ホローロール(地区)」という語は、語源的にはこの「ホロー」の系譜に属するものの、行政区分の位相においてではなく、都市計画の位相において創られた概念である。
- 20) あるいは、それを前節の対比を用いて、ナツァグドルジ(1930)がドゥゲルスレン(1956)に先行していると言い換えてもよい。
- 21) モリス・ロッサビは、「ショック療法」に批判的な立場から、この間の急速な市場経済化がモンゴルの社会、経済に、いかに深刻な打撃を与えるものであったかを、特定の機関や人物のすすめた政策を追いながら、詳細に描いており、特にこの節を記述する際に参考になった。
- 22) モンゴルの土地の私有化をめぐる言説分析としてはデーヴィッド・スニースの研究が、また特にその言説のナショナル／トランスナショナルな次元をめぐるのは滝口良の研究がある(Sneath 2002; 滝口 2006)。
- 23) Ezemshikh の訳。近年、民法上の占有概念と区別するため、日本語では「保有」と訳されることもある。
- 24) もちろん「影のビジネス」とも言われるインフォーマルセクターでのゲル地区の住民間のハシャーの「売買」においては、法的な「所有権」は関与しない。
- 25) このような、都市計画と私有化の間の対立は一過性のものにすぎず、その後の都市計画に加えられつつある修正をみると、現在、より市場経済化の動きへと寄り添ったかたちで、両者の対立は収束しつつあるのかもしれない。しかし、仮に制度的次元における調停を認めるにしても、両者が現実に適用されたときに、どのようなバランスをとるかは不明であり、丹念なフィールド調査が要請されることになる。
- 26) 2007年現在、息子夫婦はこのハシャーを廃棄し、数軒離れた先に引っ越してきた息子の妻の親族のハシャーへと移った。ドルジ夫婦もその後、妹のハシャーから出て、息子の仕事先である市場の近くに新たにハシャーを手に入れた。
- 27) あるいは、排除という形式で包摂されていたと言うべきであろうか(cf. アガンベン 2003)。
- 28) むしろ、ブラヴォイとヴァーディリーのいう「移行」とは、このような、モンゴルで言うところの1990年代初頭の混乱期のような時代を念頭に置いたものであろう。

- 29) 本稿のこれまでの考察からすれば、事例2や「土地私有化」政策が、ゲル地区を包摂する新たな都市空間の創造に関わるのに対し、むしろ、事例1や「新たな総合都市計画」の方にこそ、ゲル地区を排除、周縁化する側面が残されていることになる。

文 献

ADB

- 1999 Report and Recommendation of the president to the Board of Directors on a Proposed Loan and Technical Assistance Grant to Mongolia for the Cadastral Survey and Land Registration Project. RRP: MON30531. Internet, (<http://adb.org/>).
- 2002 Program Performance Audit Report on the Agriculture Sector Program (Loan 1409–MON [SF]) in Mongolia. PPA: MON 27536. Internet, (<http://adb.org/>).

アガンベン, G.

- 2003 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳, 以文社。

Amarsanaa, J.

- 2005 Mongol ulsyin irgend gazar ömchlüülekh tuhai acuudal ba olon ulsyin nökhstöl baidal. In J. Amarsanaa and Sh. Batsükh (eds.) *Gazar, Udirdlaga, Erkh zui (Tüüver ögüüel)*, pp. 15–25. Ulaanbaatar.

Batsükh, Sh.

- 2005 Mongol ulsyin gazryin hariltsaanyi shinetgeliin önöögiin baidal, tsaashidyin chig handlaga. In J. Amarsanaa and Sh. Batsükh (eds.) *Gazar, Udirdlaga, Erkh zui (Tüüver ögüüel)*, pp. 5–14. Ulaanbaatar.

Bruun, O. and O. Odgaard

- 1996 A Society and Economy in Transition. In O. Bruun and O. Odgaard (eds.) *Mongolia in Transition: Old Patterns, New Challenges*, pp. 23–41. Richmond: Curson press.

Burawoy, M. and K. Verdery

- 1999 Introduction. In M. Burawoy and K. Verdery (eds.) *Uncertain Transition: Ethnographies of Change in the Postsocialist World*, pp. 1–17. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Department of Statistics, information and research of Ulaanbaatar

- 2004 “Ulaanbaatar–XX Century” *STATICAL HNDBOOK*. Ulaanbaatar.

Dügerstüren, L.

- 1999 *Ulaanbaatar hotin tüühees (Tüühen barimtat товчоо)*. Ulaanbaatar.

Galdan

- 1960 *Erdeni yin erike kemekü teüke bolai* (monumenta historica, tomus III, Fasc. I). Ulaanbaatar.

Idshinnorov, S.

- 1994 *Ulaanbaatar hotin tüükhiiin huraangui*. Ulaanbaatar.

本田実信

- 1991 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会。

Luvsanbaldan, H.

- 1975 *Mongolchuudin üg khellegyin tüükh garlaas*. Ulaanbaatar.

Maiskii, I.

2001 *Orchin uyeiin mongol (avtonomit mongol XX zuunyi garaan deer)*. Ulaanbaatar.

Mongol ulsyin ündesnii statistikiin gazar

2004 *Mongol ulsyin ctatistikiin albanyi üüsel khögjil*. Ulaanbaatar.

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著

1988 『モンゴル史 1』田中克彦監修, 二木博史・今泉博・岡田和行訳, 恒文社。

永井三岐子

2002 「市場経済化移行期における ODA」小長谷有紀編著『遊牧がモンゴル経済を変える日』pp. 13-37, 出版文化社。

西垣 有

2005 「ウランバートル市の『起源』——モンゴルにおける社会主義／ポスト社会主義の歴史叙述」『年報人間科学』26: 237-258。

2007 「モンゴル・ウランバートル市におけるトランスナショナルな場の生成」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書 2004-2006 第三巻——トランスナショナルリティ研究』pp. 217-245。

小沢重男編著

1994 『現代モンゴル語辞典・改訂増補版』大学書林。

ロッサビ, M.

2007 『現代モンゴル——迷走するグローバリゼーション』小長谷有紀監訳, 小林志歩訳, 明石書店。

芝山 豊

2003 「未完の構造 D・ナツァグドルジの短編小説について」芝山豊・岡田和行『モンゴル文学への誘い』pp. 292-314, 明石書店。

Sneath, D.

2002 Mongolia in the 'Age of the Market': Pastoral Land-use and the Development Discourse. In R. Mandel and C. Humphrey (eds.) *Markets and Moralities: Ethnographies of postsocialism*, pp. 191-210. Oxford: Berg.

杉山正明

2000 『世界史を変貌させたモンゴル——時代史のデッサン』角川書店。

滝口 良

2006 「〈帝国〉はどこにあるのか——モンゴル国の土地私有化政策に見る〈帝国〉の現れ」山下範久『帝国論』（講談社選書メチエ）pp. 79-112, 講談社。

柳澤 明

1986 「イフ・フレー（庫倫）貿易について」『史観』115: 73-85。

